



お茶を飲みながら、
ぎのわんの歴史を
のぞいてみませんか？



宜野湾市制施行60周年 市昇格の裏で起こった「こぼれ話」

1962(昭和37)年7月1日、宜野湾村は従来からの希望であった、「市昇格」を果たしました。これを祝うイベントが、12日から一週間のあいだ、めじろ押しで開催されました。ちょうちん行列、仮装行列、紅白歌合戦、かりゆし民謡祭、琉米親善柔道大会、オートレース、全島角力大会、闘牛大会などで、祝賀ムード一色であったそうです。

さて、「宜野湾市」という名称は、私たちにとって全く違和感がありませんが、ひよっとすると、別の市名になっていたかもしれないという事は、皆さんご存知ですか。宜野湾村では、市昇格の半年前、新しい市名を村内外の人びとに募りました。「宜野湾市」という意見も当然ありましたが、今ではびっくりするような名前もありました。

天満市・吉野市・大山市・普天満市・普天間市・宜野ノ宮市・布天真市・松山市・大野市・三原市・天野市・中野宮市・松宮市・宮松市
歴史ある琉球八社の一つである普天満宮を連想させるもの、戦前に国指定天然記念物であったジノンナンマチ(宜野湾並松)を連想させるものなどがありますね。最終的には、現在の「宜野湾市」に決定しています。
市昇格にあたって、祝賀電報が、市内外から送られてきました。なかには本土からのもの

のもありました。宜野湾村出身で国語学者の奥里将建は、当時兵庫県神戸市に在住でした。その電報の文面は次のようなものでした。

コウベクニタマ三
フテンマシチヨウ
ナカムラハルカツ殿
ゴセイカイヲシユクシ、ゴンゴノゴハッテ
ンライノリマス。
神戸
オクサト将建(※原文ママ)

消印は7月1日となっており、昇格より少し遅れて送られたことがわかります。注目すべきは宛名の肩書です。当時の仲村春勝市長を「フテンマシチヨウ」としています。奥里は字宜野湾出身ですが、ひいきをせずに、その後発展した中心地は普天間で、これこそふさわしいとかがえたのでしょうか。ちなみに細かい話ですが、「フテンマ」が、「普天間」なのか、「普天満」なのかは、いまとなっては残念ながら謎のままです。

【問い合わせ】

市立博物館 ☎870-9317



▲奥里将建が送った祝賀電報「フテンマシチヨウ」とある。



▲奥里将建(1888~1963) 教育家で国語学者。独学自習の勉強家であった。



2022年は、宜野湾市にとって…?

2022年は、沖縄県が本土復帰して50年となる節目の年です。そして、宜野湾市にとつては、更におめでたい年となっているのですが、何がおめでたいのか、皆さんご存知でしょうか？

正解の発表の前に、まずは簡単に、宜野湾の歴史を説明しますと、宜野湾市は1671年、浦添間切・中城間切・北谷間切から13村を割き、新たに1村を設けた計14村で「宜野湾間切」として新設されました。ちなみに、「間切」は、現在の市町村に相当します。その後、間切制が廃止された1908(明治41)年に宜野湾間切から宜野湾村となりました。そして、戦後は人口が3万人を超え、市昇格への諸条件を満たした1962(昭和37)年7月1日に宜野湾村から宜野湾市へとなりました。つまり、今年が宜野湾が「市」になって、60年の節目の年となります。

そこで、市立博物館では「市制60周年・本土復帰50周年記念企画展」として、「山田真山展―アトリエに残された真山の足跡―」と「めでたい！ 宜野湾60さい!!」を開催いたします。

「山田真山展」は、以前にも開催しましたが、今回は、真山が手がけた平和祈念像原型が残る普天間のアトリエ跡の資料を中心に紹介します。また、「宜野湾60さい!!」

では、宜野湾が「市」になってから60年分の「懐かしい」や「驚き」を紹介する内容となっており、記録と記憶で市制60周年を盛り上げていきます！
市制60周年は2度とない節目となりますので、この機会にぜひ、「宜野湾」について、感じていただきたいと思います☆
皆さまのご来館、お待ちしております！

◆市制施行60周年・本土復帰50周年記念企画展Ⅰ
山田真山展―アトリエに残された真山の足跡―
日 程 7月27日(水)~9月25日(日)

◆市制施行60周年・本土復帰50周年記念企画展Ⅱ
めでたい！ 宜野湾60さい!!

日 程 10月26日(水)~12月18日(日)
休 館 日 毎週火曜日・祝祭日
※文化の日(11/3)は開館
場 所 市立博物館 企画展示室
入 場 無料
問 合 せ 市立博物館 ☎870-9317



▲平和祈念像原型を制作する山田真山氏



▲宜野湾市昇格時の宜野湾市役所 (普天間 1962年)



市立博物館の
ホームページは
コチラ